韓国語テストにおけるパッチムと助詞はヒントになりうるか
한국어 테스트에 있어서 받침과 조사는 정답 도출을 위한 힌트가 되는가

斉藤信浩（九州大学）・金美仙（同志社大学他）・小島大輝（近畿大学）

要旨

斉藤・玉岡（2014）では、韓国語能力を測定するために、最小限度の語彙能力の測定から被験者の言語レベルを予測する測定テストを開発した。このテストでは、妥当性（validity）確保のために以下の６点を考慮した。１ つ目は刺激文自体の難易度調節、２つ目は選択肢間の難易度調整、３つ目は選択肢の語種と品詞の統一、４つ目はランダム確率を保証するよう正答を均等配置、５つ目はディストラクタの挿入、そして 6 つ目は体言末のパッチムによる正答の予測を排除するために選択肢をパッチム有りの語か無しの語かに統一したことである。例えば「오늘은 일요일이지만 교실에（ ）이 있습니다」という設問に「가게」「코」「사람」「시간」が選択肢であると、助詞の「이」がヒントになり、実質選択肢が「사람」「시간」の 2 つになってしまう。テスト法の分野では、１から５までの方略はどの言語でも共通だが、６つ目のパッチムに対する配慮は日本語にはない韓国語独自のものである。韓国語のテスト作成において、パッチムによるヒントの排除は当然のことと捉えられているが、体言末のパッチムの有無と後続の異形態の助詞が得点のヒントになりうるかを検証した研究は見当たらない。本研究はパッチムのヒントの有る問題群と無い問題群を用意し、四肢選択式の客観テストによって韓国語を学習する 30 名の日本語母語話者(学習月=16.23,SD=6.63)を調査した。その結果、ヒント無しの問題群は、ANOVA による得点分析の結果、主効果に有意差が見られ、初級(M=2.75,SD=1.16)＝中級(M=3.00,SD=2.20)＜中上級(M=6.57,SD=1.62)となり、レベル間に差が見られたが、ヒント有りの問題群では、主効果に有意差が見られず、初級(M=4.63,SD=3.78)、中級(M=5.67,SD=3.13)、中上級(M=7.29,SD=3.25)の間に差が見られなかった。ヒントが有った場合、初級でも 4.63 点を得点し、中上級の学習者と得点差がなかったということは、学習の初期段階でもパッチムの有無がヒントとなりうることを示している。また、主格・対格・主題の３種類の助詞は、パッチムの有無によりその形態を変える。この助詞間の得点を比較した結果、主効果に有意差は見られたものの、多重比較では差が見られず、どれも均等に習得されていることがわかった。意味情報を排除するため有意味語と無意味語のセットを用意し検証したが、パッチムがヒントとなる場合、無意味語であっても学習者は得点できていた。この結果、意味情報、助詞の種別に関係なく、学習者はパッチムの有無と助詞による情報から得点ができることが確認された。

韓国語の「ha-ko iss-ta」形と西日本諸方言「シヨル」形との対応関係
한국어의 「ha-ko iss-ta」와 서일본방언「シヨル」와의 대응관계

高恩淑（一橋大学他）

要旨

日本語の共通語のアスペクトは、二項対立型で「スル」形、「シテイル」形によって＜完成相＞と＜継続相＞に分けられるが、韓国語は基本的に三項対立型で「ha-nta」形、「ha-ko iss-ta」形、「hay iss-ta」形によって＜完成相＞、＜進行相＞、＜結果相＞の三つが区別される。つまり、日本語の共通語では、一つのアスペクト形式「シテイル」形で＜進行相＞と＜結果相＞を表現するが、韓国語では二つの異なる形式で表される。一方、西日本の多くの方言には、「シ（連用形）＋オル」から成立した「シヨル」系形式と、「シテ（テ形）＋オル（存在動詞）」の文法化によって成立した「シトル」系形式のアスペクト対立がある。韓国語のアスペクトのように、西日本諸方言も「スル」形、「シヨル」形、「シトル形」によって、<完成相>、<進行相>、<結果相>の三つが区別される。これまで、日本語と韓国語のテンス・アスペクト形式に関する対照研究は多く成されてきたが、同じ三項対立型のアスペクト形式を用いる西日本諸方言と韓国語に関する研究は管見の限り見当たらない。よって、本発表では西日本諸方言と韓国語のアスペクト形式に関する対照研究の一環として、韓国語の「ha-ko iss-ta」形と西日本諸方言「シヨル」形との対応関係を探っていきたい。

一般に、日本語の共通語は状態性の強い主体変化自動詞「乾く、変わる、落ちる、溶ける、割れる、切れる」などの場合、文脈の支えがなければ「シテイル」の形で「動作進行」を表しにくいとされるが、韓国語は「ha-ko iss-ta」形で「変化過程」を表すことができる。同じく西日本諸方言の「シヨル」形も＜進行相＞をも表し得る点で類似している。また、共通語では場面・文脈の支えがあっても「行く、来る、帰る、戻る、着く」などの位置変化を表す移動動詞や、「（雪が）積もる、（灯りが）つく、（光が）消える、」などのように変化の終わりが曖昧な状態性動詞の場合、「シテイル」形で「変化過程」を捉えることができないが、韓国語の「ha-ko iss-ta」形と西日本諸方言「シヨル」形は、発話時において＜変化の最中＞であることを表すことが可能である。その一方、日本語の共通語と同様に韓国語も、動作性動詞（「食べる、歩く、叩く、走る、遊ぶ、動く、泳ぐ、通る、飛ぶ、泣く、降る、流れる」など）の場合、<進行相>しか表せないのに対し、西日本諸方言は動作性動詞であっても、<進行相>と<結果相>の対立がある点で韓国語とは異なる。こういった点からみると、西日本諸方言は韓国語に比べて動詞の意味分類に依存することなく、ほぼ自由に一つの動詞で二つの局面を表現することが可能であると考えられる。

中期朝鮮語形態素解析用辞書の開発
중세한국어 형태 분석 사전의 개발

須賀井義教（近畿大学）

要旨

本研究の目的は，オープンソース形態素解析エンジン MeCab（めかぶ）を用いて中期朝鮮語，特に 15 世紀の朝鮮語を形態素解析するための辞書を開発し，解析済みコーパスの構築など，その活用方法について検討するところにある．

15 世紀朝鮮語の形態素解析済みコーパスは構築がやや遅れており，홍윤표(2006)，김현주・김흥규(2013)で指摘されているように，平文コーパスの半分以下の分量にとどまっている．また解析済みコーパスがテキストファイルなどの汎用的な形式ではなく，特定のワープロソフトに依存したファイル形式であり，検索などの処理において不便を生む結果となっている．こうしたコーパスの分量や利用上の不便を克服し，15 世紀朝鮮語の計量的な研究を促進するため，本研究では MeCab を用いた自動形態素解析の方法を提案し，効率的なコーパス構築のための解析用辞書構築を行う．

MeCab は解析用の辞書に基づいて形態素解析を行うプログラムであり，解析用辞書を自前で用意すれば様々な言語の解析が可能である．また，辞書を作成する際に，盛り込む情報を自由に設計することができる．そのため，従来の 15 世紀朝鮮語解析済みコーパスには記述されていない情報，例えば品詞の詳細情報，活用に関わる情報や補足情報などを盛り込み，解析を行うことができる．

本研究では，15 世紀朝鮮語を扱った村田寛(2010)や須賀井義教・村田寛(2011)，および現代朝鮮語を扱った須賀井義教(2013)などの成果を基に，解析用辞書の再設計を行った．現時点で辞書に登録されている項目数は 4,000 程度であり，十分とは言えない．発表時まで辞書項目と学習用データを増やし，その上での解析率を提示したい．また，形態素解析済みのデータを用いてどのような計量が可能になるか，ツールの利用なども合わせて，その例を提示する．

〈参考論著〉

須賀井義教(2013)「MeCab（めかぶ）を用いた現代韓国語の形態素解析」，朝鮮語研究会編『朝鮮語研究』5, pp.283-312.

須賀井義教・村田寛(2011)「15 世紀朝鮮語の形態素解析について」，『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』第 1 巻第 2 号，近畿大学教養・外国語教育センター，pp.41-56.

村田寛(2010)「15 世紀朝鮮語の形態素解析の試み—MeCab を利用して—」，『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』Vol. 10 No.3，福岡大学，pp.17-28.

김현주·김흥규(2013), '세종역사말뭉치'의 몇 가지 현안과 그 개선 방안, "우리어문연구" 46 집, 서울: 우리어문학회, pp.85-114.

홍윤표(2006), 국어사 연구를 위한 전자자료 구축의 현황과 과제, "국어사 연구 어디까지 와 있는가", 서울: 태학사, pp.87-143.

朝鮮語の해요体と日本語の「です添加型丁寧語」 —対照研究の可能性と言語教育における応用価値—

한국어의 '해요'체와 일본어의 "です첨가형 공손법"—대조연구의 가능성과 언어교육에 있어서의 응용가치—

河崎啓剛（崇実大学）

要旨

本稿の言う日本語の「です添加型丁寧語」とは、しばしば「形容詞終止形＋です」等として言及される、比較的新しく形成された一連の丁寧語を指す。この名称は、対象を「形容詞」などと限定することなく、「です添加」によって特徴づけられる新たな丁寧語の活用体系としての一般化を試みるものである。

例えば「よいです」「よかったです」の様な「形容詞の終止形(タ形含む)＋です」の形は、もはや本来規範的とされた「ようございます」「ようございました」を駆逐しつつあり、また「しないです」「しなかったです」の様な「否定助動詞の終止形(タ形含む)＋です」の形も、規範的とされる「しません」「しませんでした」の代替として、既に口語において広く定着している。これらは現代日本語において「口語的」な「非格式体」として、丁寧語の新たな活用体系を形成しつつある。この現象は、決して最初から「形容詞」のみに限定して捉えるべきものではない。既に一部の地域方言や社会方言において観察される「動詞の終止形(タ形含む)＋です」の形、即ち「スルデス」「シタデス」の形や、推量形としての「しよう」「しましょう」を駆逐しつつある「するだろう」「するでしょう」の形などとも合わせて、体系的に捉えるべき現象である。

一方、19 世紀に朝鮮語の「해요」体を形成した「丁寧化のマーカー」「 - (이)요」の起源については、未だ「定説」と呼ぶには至らないものの、朝鮮語内的な議論を尽くした高光模(2000, 2004)等により、指定詞「이다」の丁寧形「이오」に由来すると見る説が最も有力視されている。つまり、元々は日本語の「です」に当るものだった、というのである。

本稿の目的は、この朝鮮語の「해요」体と日本語の「です添加型丁寧語」が多くの面で似ており、「本質的に同じ現象」と認められることを示すことにある。両者の間に認められる並行性は、形態の歴史的形成過程、統語的な出現環境にとどまらず、「口語的」な「非格式体」としての役割などにまで及ぶものであり、形態・統語・意味にわたる包括的なものである。両者が「本質的に同じ現象」と認められるということは、つまりそれを基盤とした幅広い「対照研究」が可能となることを意味しており、その意義は甚だ大きい。両者を対照的な視点から観察することは、それぞれを個別に見ていた時には見えなかった多くの有益な事実や洞察を両者にもたらしてくれるものである。この新たな「両言語の接点」が、今後の日朝両言語の研究や教育の場において広く認識され、有効に活用されるべきものと期待される。

ハングル検定協会『トウミ』の新装版について－改訂版からの変更点と検定試験との整合性－
한글검정협회 "도우미"의 신장판에 대하여 -개정판에서 변경된 부분과 검정시험과의 정합성 -

油谷幸利（同志社大学・名誉教授）

要旨

2016 年 2 月にハングル能力検定協会から『合格トウミ』の新装版が発行された。外見的には 2011 年 2 月に発行された『合格トウミ(改訂版)』(初・中級編と上級編の 2 冊からなる)および 2011 年 3 月に発行された『上達トハギ』の内容を，初級編(4・5 級)と中級編(準 2・3 級)および上級編(1・2 級)の 3 分冊として出版したものである。出題基準を見る限り『改訂版』と『新装版』の間に顕著な違いは見受けられないが、具体的な相違点に関しては詳細に検討する必要がある。本発表は両者を①見出し語のレベル・区分間の移動、②見出し語の削除、③見出し語の追加、④分かち書きを含む見出し語の一部変更、⑤問題点、⑥検定試験との整合性、という観点から分析したものである。参考資料として CD-ROM 版『韓国語学習辞典』を配布し、初級レベルの単語練習について簡単に解説したい。

한국어 문어 텍스트와 구어 텍스트의 어휘 풍부성 연구 - 어휘 다양도와 어휘 밀도를 중심으로-
韓國語文語テキストと口語テキストの語彙多樣性について ―語彙の多樣度と密度を中心に―

안의정（연세대학교）・서상규（연세대학교）

要旨

이 연구는 한국어 텍스트의 어휘적 풍부성을, 실제의 말뭉치를 통해 계량적으로 비교, 분석하기 위한 연구이다.어휘의 풍부성을 측정하기 위한 방법에는 어휘 다양도(lexical variation), 어휘 밀도(lexical density), 어휘 세련도(lexical sophistication), 오류의 수(number of errors) 등이 있다. 어휘 다양도는 학습자를 대상으로 한 연구에서 어휘 능력 향상을 측정하는 도구로 많이 쓰이고 있다. 이는 원래는 아동의 제 1 언어 발달을 측정하기 위해 사용되었으나, 정상 아동과 지체 아동의 언어 비교나 제 2 언어 발달에도 사용되며, 말뭉치 기반 문체론에서는 두 텍스트 간의 차이를 계량적으로 보여주기 위해 많이 사용된다. 이 수치는 유형(type) 수를 구현(token) 수로 나눈 것으로 흔히 TTR(Type-Token Ratio)이라 불리운다. 어휘 밀도는 기능어 사용에 대한 내용어의 빈도를 구하는 방법으로 측정된다. 그리고 어휘 세련도는 저빈도 어휘의 적절한 선택을 의미하며, 오류의 수는 잘못 쓰인 어휘를 의미하며 특히 제 2 언어 학습자들의 어휘 측정에 사용된다.

이 중 어휘 다양도와 어휘 밀도는 개별 단어보다는 구어나 문어 텍스트에 사용되는 어휘에 초점을 맞추는 양적 측정 방법이라 할 수 있다(배도용, 2012: 99-100). 이렇듯 어휘 밀도와 어휘 다양도는 문어와 구어 텍스트를 비교하는 좋은 방법임에도 한국어를 대상으로 한 정확한 측정은 이루어진 바가 없다. 최근의 연구는 대부분 특정 학습 단계에 있는 학습자들의 어휘 측정에 맞춰져 있다.

영어를 중심으로 한 어휘 밀도 연구에서는 문어가 어휘적인 단어를 더 많이 포함하는 것으로 알려져 있으며, 쓰기 텍스트의 경우 40% 이상이 내용어로 구성되어 있다고 보고 있다. 영어에서의 내용어는 주로 명사, 본동사, 형용사, 형용사에서 파생된 부사로 분류하고 있어 한국어의 그것과 차이가 있을 수 있다. 그리고 구어 텍스트는 어휘 밀도가 40%보다 낮으며, 30% 미만일 경우 어휘적으로 희박하다고 보고 있다. 어휘 밀도는 구어 텍스트 분석에서 더 많은 역할을 하는 것으로 알려져 있다. 이 연구에서는 이를 다양한 구어 텍스트의 사용역에 적용하여 분석해 보고자 한다.

이 연구에서 사용할 말뭉치는 각각 100 만 어절의 규모로 구성된 문어와 구어 말뭉치로 한국어를 대표하는 균형 말뭉치라 할 수 있다. 말뭉치의 이름은 새연세말뭉치 1(문어)과 새연세말뭉치 2(구어)이다. 새연세말뭉치 2 는 공적/사적, 대화/독백, 텍스트 유형별, 남/여의 사용역 연구가 가능하다.

이 연구의 내용적 구성은 다음과 같다. 첫째, 기존에 한국어를 대상으로 이루어진 어휘 다양도와 어휘 밀도 측정과 그 결과, 둘째, 이 연구 대상과 방법, 셋째, 한국어 균형 말뭉치를 대상으로 한 어휘 다양도와 어휘 밀도, 품사별 어휘 밀도의 측정 결과, 넷째, 다양한 구어 사용역에 따른 어휘 풍요도 측정 결과를, 밝히고자 한다.

韓国語教育のための冠形詞形語尾 ‘-ㄹ/을, -는’の意味分析
한국어교육을 위한 관형사형 어미 ‘-ㄹ/을, -는’의 의미 분석

前村和亮（韓国外国語大学）

要旨

本稿の目的は、韓国語教材での‘-을, -는’の意味説明が不十分であることを指摘し、‘-을, -는’の使い分けに関する情報と属するカテゴリーを体系的に説明することにある。先行研究は、形態設定と意味に関する研究、学習者の誤り調査と教育方案を模索した。

まず本稿は、教材が‘-을, -는’の使い分けに関する情報とカテゴリーを体系的に説明できなかったと指摘する。カテゴリーを体系的に説明するには、‘-을, -는’がもともと抽象的なカテゴリーに属し、動詞の性質によってテンス·アスペクト·モダリティのカテゴリーに属すると主張する。各々のカテゴリーの定義を総合し、‘-을, -는’は‘主観的な認識’の抽象的なカテゴリーに属すると捉える。

研究方法は、「めざめよ！」2012 年 1 月から 12 月までの、‘-을, -는’を含む例文を収集する。‘-을, -는’と結合する動詞を、事件の開始点と終結点の存在や動きの観察可能性などを基準に‘動きの強中弱’、知覚·心理動詞として分類する。

知覚·心理動詞と結合する形態は、‘-는’のみ発見できた。知覚·心理動詞は、主語の心理状態を描写するので、‘-는’が[心的作用]を表すモダリティのカテゴリーに属する。

動きが弱い動詞と結合する形態は、‘-는’のみ発見できた。この動詞は、主語が持つ、一定な性質と一時的な性質に分類される。前者は、[恒常的属性]を表すモダリティのカテゴリー、後者は、[現在]または[一時的属性]を表すテンス·モダリティのカテゴリーに属する。

動きが強い動詞と結合する形態は、‘-을, -는’を発見できた。動きが強い動詞は、瞬間性と非瞬間性に分類され、後者がアスペクト的性質を持つ。動きが強ければ、動きによる時間の流れを把握できるゆえ、テンスのカテゴリーに属する。また、内包節内部に主語が存在すれば、主語の能動的な動きを描写する[意志]を表し、内包節内部に主語が存在しなければ、動きによる被修飾体言の変化の様相を比べる[変化様相の比較]を表す。

動きがふつうの動詞は、受け身の場合、人間以外の動きの場合、人間の動きの場合の３つに分類する。受け身の場合の形態は、‘-을, -는’を発見できた。受け身は、主語が自らを被害者として捉えるので[被害意識]を表す。主語が無情物の場合の形態は、‘-는’のみを発見できた。人間が制御できるものと制御できないものに分類され、[定められた性質]と[自然の法則]を表す。主語が有情物の場合の形態は、‘-는’のみを発見できた。３つの部類の形態は、すべてモダリティのカテゴリーに属する。

教材は、‘-을, -는’がもともと‘主観的な認識’のカテゴリーに属し、動きの強さの程度による使い分けの情報と属するカテゴリーの体系的な説明を反映すべきである。

現代韓国語の「다가」のスキーマと意味拡張
현대한국어 '다가'의 스키마와 의미 확장

李　英蘭（神田外語大学他）

要旨

現代韓国語 の「다가(*1)」は、大きく「에（に）」、「(으)로（で）」、「에게・한테（に）」などの格助詞類に後接し形（(1)～(3)）と、連用形の「-아/어」に後接した形（(4)～(7)）、という２つの形で現れる。

(1) 가방은 테이블에다가 놔 둬.
(2) 짚으로다가 모자를 만들었다.
(3) 그 사실을 엄마한테다가 일러바쳤다.
(4) 빚을 얻어다가 장사를 시작했다.
(5) 철수를 찾아다가 혼냈다.
(6) 창문에는 화분을 가져다가 놓았다.
(7) 철수를 데려다 주었다.

が、その必須性には、違いが見られる。即ち、(1) ～ (5) のように「다가」の使用が必須ではない場合と、(5) ～ (6) のように必須である場合がある。本研究では、いずれの場合においても、「다가」の使用には、「力の作用者が存在し、ある物体を移動させ、着地点まで届ける」というスキーマ（正確にはイメージ・スキーマ【図１】）があることを明らかにしたい。

【図１】「다가」のイメージ・スキーマ

力の作用（移動）
物体 ○――――――――――→● 着地点

(1) ～ (7) の用例において「다가」のスキーマをもっともよく事例化したプロトタイプは、(6) と (7) であり、その際の「다가」は必須である。そして、(1) ～ (5) は、それぞれスキーマの一部を事例化した周辺事例であり、その際の「다가」は必須ではない。例えば、(1) の「다가」は、「다가」のスキーマのうち、「着地点」が際立ち、力が作用し移動されるというイメージは (6) や (7) ほど顕著ではない。また、(5) の場合は「チョルスを探す」ための「力の作用」は現れるが「移動」や「着地点」のイメージは薄いため、他の例に比べ、より周辺的な事例であると考えられる。
本研究では、１つ目の目的として、まず、このように現代韓国語に現れる「다가」の使用例を中心に、上記の【図１】で示した「다가」のスキーマが如何に事例化されて現れているのかを考察する。その際に、特に (5) ～ (7) のように「-아/어 다가」の「다가」に後接する動詞について、プロトタイプから周辺事例に拡張するにつれ、どのような特徴が見られるかをも考察する。

その後、本研究の２つ目のの目的として、【図１】のような「다가」のスキーマは、現代韓国語のみならず、中世韓国語においても同様であることを示したい。
「다가」の原型である「다ㅋ다」の辞書的意味は、「（主に「다가」の形で）ものなどをある方向の近くへ移す（표준국어대사전）」となっているが、本来の「다ㅋ다」の基本的意味は、漢文の「將」「把」「取」に対応する「持つ」であるという見解が一般的である。特に、전후민（2014）では、現代語の辞書的意味は、近代以降の文法化を通して派生された意味であると述べている。
が、「다가」が本動詞として用いられた次の（8）の場合も単に「持つ」という意味合いより、「持って行く」のように解釈されるという点から、中世韓国語における「다가」にも「物体を移動させ届ける」というスキーマがあると考えられる。

(8) 阿難이도 아니 받고 닐오(되) 네 바리(를) 어듸 가 어듣다 도로 다가 두어라 (하)야(날)
(*2)【月釋 7:8a】

「다가」をそのスキーマから通時的に考察することにより、従来の研究で言う「다가」の「持つ」という意味が希薄化し、「近接」や「維持」「強調」のような意味に変化した文法化の過程には、常に「物体を移動させ届ける」というスキーマがあり、それが機能的に働いていたことを明らかにする他、そのスキーマにより、必須ではないにも関わらず、「다가」が用いられる理由が説明できると考えられる。

＜参考文献＞
전후민(2014)「{다가}의 변천사」、우리말글、63、29-68

(*1)「밥을 먹다가 전화를 받았다」のような連結語尾の「-다가」は、本研究の考察対象の「다가」と区別し対象外とする。
(*2) メールの本文での文字化けのため、中世語表記には（）をつけ、現代語表記にしてある。

演劇的なアプローチによる韓国語教育 －松山大学応用クラスにおける試み―
연극적 기법을 통한 한국어 교육－마쓰야마대학에서의 실천예를 중심으로－

姜英淑（アジア・アフリカ言語文化研究所）

要旨

本発表は，2015 年松山大学の応用クラスにおける授業モデルを紹介することが目的である。
この授業では，児童文学「견우와 직녀」を教材とし，教育演劇の手方を取り入れた授業の可能性を試みた。
教育演劇（educational theatre）とは，共演のための演劇教育ではなく，教育のために演劇手法（インタビュー，ロールプレイ，討論，など）を授業活動に取り入れた過程中心の教育法を意味する。
言語の 4 技能（読む・書く・話す・聞く）を学習し，且つ学生が積極的に授業に参加し，相互交流による協調性や創意力を養うことも可能である。
15 回の授業は，オリジナルのシナリオ作成による作文能力，読解力，グループ活動による会話能力や聞き取り能力のスキルアップを目標とした。授業のスケジュールは以下の通りである。

科目名	：ハングルキャリアアップ I （90 分）
授業の目的	：韓国の文学作品を使用し，「読む，書く，聞く，話す」のスキルアップを目指す。
教材	：韓国の児童文学『견우와 직녀』
内容	：第 1 回目：オリエンテーション（授業の趣旨や評価法などの説明，資料配布） 第 2 回目～第 8 回目：内容の理解（語彙，文法，発音，作文などの学習）
第 9 回目	：グループの口頭発表（中間テスト兼ねる）
第 10 回目～14 回目	：内容の理解（語彙，文法，発音，作文などの学習）
第 15 回目	：口頭発表（グループ別）
評価	：口頭試験（2 回）及び筆記試験

上記のスケジュールによる具体的な授業モデルや評価法，学生達のグループ活動の映像を紹介し，今後の教育演劇の活用や可能性について考えていきたい。

「-어야」構文について—「必須条件」の日韓対照研究—
「-어야」 구문에 대해 —「필수조건」의 한일대조연구—

金智賢（宮崎大学）

要旨

本発表では、朝鮮語の「-어야」で代表される所謂必須条件について、日本語との対照分析を行うことで、必須条件の範疇や定義について再考し、「-어야」の本質を明らかにすることを目的とする。一般に、日本語は仮定条件形式が、朝鮮語は確定条件形式が発達していることが知られているが、「-어야」は必須・義務（仮定条件）などを表す特殊な形式として位置づけられることが多い。日本語における義務の表現は、通常の条件形式「バ」「ト」や「テハ」等が用いられるが、形態論的に「-어야」に対応する「テコソ」はその使用に制限がある。一方、朝鮮語では条件形式の「-(으)면」「-어서는」の存在にも関わらず、必須・義務を表す際は「-어야」が幅広く用いられる。このような背景を踏まえて本発表では、「-어야」が用いられる表現を「-어야」構文と呼び、「-어야」構文を（１）一般的な必須条件を表すもの（「윗물이 맑아야 아랫물이 맑다.」）、（２）慣用化し当為性を表すもの（「출세하려면 공부를 열심히 해야 된다.」）、（３）反事実条件を表すもの（①「신탁에 의하면 오구대왕과 길대부인의 혼인은 이년 후에 했어야 아들 세자를 볼 수 있었다.」②「그쯤에서 나는 전화를 끊었어야 옳았다.」）、（４）終結語尾化し様々なモダリティを表すもの（①「저도 살아야죠.」②「애가 잠을 자야지.」）に分け、それぞれの構文を日本語と対照分析する形で論を進める。

（１）は、日本語では「なければ～ない」「ないと～ない」などの否定の仮定条件で表現しなければならない。朝鮮語でも同じような表現で義務表現が表せるが、「-어야」を用いた場合とはニュアンスが異なり、文脈に応じて使い分けられている。（２）は、「なければならない」「ないといけない」などの固まった表現になるが、否定の仮定条件を表すということには変わりがない。（３）は、仮定条件文では表現しにくく、目的を表す表現や義務表現などを使って表現することになる。②は一見「なければならなかった」「べきだった」類に対応するように見えるが、②の朝鮮語の例とこれらの日本語表現とでは、現実性に違いがある異なる構文で、現実性のない場合は「-어야 했다」になる。（４）の①は、日本語でも「ないと」「なくちゃ」など条件表現が固まった文末表現が存在するが、その形の形成過程では違いがある。「-어야죠」は「-어야 하지요」に分析できると考えられ、主節を含む形が固まっているが、日本語の場合、主節がとれた条件節のみが固まっている。実際、「-어야」は仮定条件を広く表す「-(으)면」とは違って独立性がないが、その性質が慣用化・文法化の過程にも影響していると考えられる。

以上の議論は、ある言語に存在する文法形式が他の言語に存在しない場合、表したいことをどう表すかという問題に関わる。本発表では、必須条件という「-어야」の意味論的意味が日本語で表せなくても語用論的意味がその役割を担うものと見て、対照分析を通じてその語用論的意味を明らかにすることを目指す。